

俳句雑誌

空

空

令和2年9月30日発行

第18巻4号

通巻第92号



2020・9

**SORA** 92号

三十五句

柴田佐知子

盛り上がるたび沖を消す夏の海

八方は山の闇なり踊り唄

青空がばら撒く雀五月来る

―「俳句」八・九月号より―

ふはふはの筍山へ鋤担ぎ

骨つなぐ筋すこやかに露を刈る

若竹や流るるごとく僧過ぎし

干草に阿蘇の星座の揃ひけり

伏流水噴くふるさとやみな素足

山国の星落ちてくる端居かな

死ぬときは何見ゆる眼か青葉の夜

田を植ゑて人無き村となりにけり

鶏を小屋に追ひ込み梅を干す

寄せつけぬ背中となりぬ草取女

引き抜きし草巻き添への球根も

蛇進む音と思へり天袋

痛きほど乾く仏飯竹の秋

青桐やよく眠り猫老いてゆく



棟梁の見事な道具棕櫚の花  
白雨過ぎ耳新しくなりにけり  
丑寅の方へ逃げこむ油虫  
海沿ひの家は平たし日の盛り  
ひとゆすりして沖を出る雲の峰  
灘の色変へて夕立来りけり  
万緑の沈めてゐたる秘仏堂  
蟬しぐれ秘仏にさるる覚えなし  
因循の芯に目つむる墓

滅ぶ星生まるる星や祭笛  
川に山車ぶち込み終る祭かな  
水鱧や迷ひ無き人味気なし  
懐はからつぽ風の白緋  
大方の遺稿は未完青あらし  
百合の香の隅まで詰まるひとりの家  
目つむりて異界に髪を洗ひけり  
待つことに飽きて涼しくなりにけり  
箱庭の山河に亡き人を招く



福岡 高倉 和子

流れゆく雲に従ふ鯉幟

藤の花くぐる秘密を持つやうに

説法の正しき背筋青楓

無人駅の無人放送麦の秋

雨上りの葉裏濃くなる五月かな

集団下校虹の真下を通りけり

地震の跡残る夏野に牛放つ

干し草に納屋のふくらむ夕べかな

東京 中田みなみ

バンガロー先づ野鼠の穴塞ぐ

体当りの火蛾が熱吐く山の窓

山荘の椅子は茶箱や豆の飯

残金を数ふや守宮覗きをり

噴く竹を涼しく回し籠を編む

六匹を生みたる犬の瞳の涼し

犬と犬気の合ふ店の桃貰ふ

初浴衣首を伸ばして出て行けり

長崎 荒井千佐代

新聞紙に胡坐の研師炎天下

噴水の止まる真夜まで汝を待てり

鍵盤深く指を沈めて原爆忌

時折はしぶき被りて根魚釣

身の裡に潮満ちあたる良夜かな

曼珠沙華もたれ合ふこと一切なし

鶏頭刈らる戦ひに負けしごと

雁渡し磯の小石のみみ合うて

埼玉 服部早苗

笑ひつつ吹く石鹼玉の細か

まつしろな皿クレソンの水の音

三ノ輪より遅日の路面電車かな

紙の傷指に八十八夜寒

目に見ゆることの安らぎ柳絮とぶ

旅鞆使はぬ春の逝きにけり

初夏や水打ちつけてガラス拭く

白鷺は水の平らを割りゆける



北九州 深川淑枝

梵鐘に竜頭の力桜咲く

一字なき石とて墓や花明り

深爪の指のももいろ仏生会

掛けられて陽炎を曳く古代布

織緋匂ふ卯の花腐しかな

機音のこぼるる茅花流しの野

研ぎ上げて出刃花冷の夜の底

鐘おぼろ疫鬼に会ひし戻橋

広島 戸栗末廣

春や春四人そろへば五日飯

まん丸き月がふはりと子供の日

蛇出でて自問自答の舌使ふ

蟻地獄大きな音が通りけり

つばくらめ運河せはしくなりにけり

一の倉二の倉暮るる牛蛙

鎌洗ふお玉杓子の水濁し

朝曇消毒液の匂ひ濃し

福岡 角野良生

流木に解脱のすがた冬了る

芽柳の風を捌いてをりにけり

初蝶や薬師如来のあそび指

火の山は笑ひやうとてなかりけり

ぶらんこ三台水溜り三つ

よきことも無けれどよき日の豆ご飯

鯉織思ひ出しては泳ぎ出す

蝌蚪ひらひら何かに当たるところまで



千葉 原 友 子

武具飾りひねもす畑に出てゐたる  
 剪りてすぐ湯舟の父へ菖蒲束  
 糸んどう挽ぐ昨夜の雨滴に身を濡らし  
 一粒に一つの発芽聖母月  
 糠もろともたかな滾らせて独り

福岡 山 内 碧

木しぶきの中に棟梁夏に入る  
 窓開けてジャスマミンの香の夜となりぬ  
 神馬なら一飛びの島霞みけり  
 サックスの響く湖畔や暮の春  
 半夏生地を這ふものは疎まれて

大野城 森 田 明 成

新緑や道も鉄路も切通し  
 薔薇切つていよいよ青き遠嶺かな  
 ていねいに柵田を仕上げ代掻機  
 借り多き一世となりぬ古茶新茶  
 骨張りし脚となりけり夕端居

糸島 小 林 朱 夏

母の日や母に説教してしまふ  
 青空はペンキ塗りたて雲の峰  
 蝉時雨いつまで続く朱の鳥居  
 秋風やこの世の恋は秘するもの  
 闇汁の底より己が声聞こゆ

粕屋 吉 田 菫

新緑をくぐり赤子の肌となる  
 ヴィーナスに少年の面夏嵐  
 梧桐に陣取りの捕虜つながるる  
 足の指ひらき青鷺考ふる  
 筑紫次郎川音高し粽結ふ

北九州 河 原 敬 子

みづうみの汀は昏し百千鳥  
 くれなゐの満月太し仏生会  
 護摩焚きに煤けし窟や春深し  
 火鉢三つ据ゑて阿闍梨が目高飼ふ  
 書に倦めば窓に夕日の柿落葉

東京 山 田 正 子

道化師の作り笑ひや春の風  
 葱坊主サドルを少し高くして  
 水草に水のふくらむひとところ  
 飛魚の羽をたたみて売られをり  
 めまといを払ひて路地の行き止り

岡垣 田 中 と し 江

蒼替へし屋根ふつくらと匂ひ立つ  
 夏霧の山裾にバス折り返す  
 麦藁のストローが待つ祖母の家  
 えごの花陶土を砕く杵の音  
 目薬をさす指ひかる夏はじめ



直方 石橋幾代

すぐ蔵になじむ雛を納めけり  
桜散り山なみ低くなりけり  
マスクして喧嘩の声のくもりけり  
新茶売る絋着物に身をつつみ  
竹藪の竹びつしりと梅雨に入る

須恵 苑 実 耶

パン作る粉にまみる夏休み  
静かさや道ごと灼くる地藏尊  
差し込まれしまま夕刊の灼けてをり  
夏まつり炭坑節で生まれり  
闇を走る花火師時に浮さ立てり

福岡 栗原京子

寒雀埃のやうに舞ひ降るる  
養生をしたしと旅へ川をんな  
母のみかん届かぬところだけたわわ  
ネクタイは鞭となりたり忘年会  
追ひ詰めし魚の跳ねをり冬青空

福岡 田代貞香

夢の中亡き夫さがす薄暑かな  
油虫出会ひがしらにたじろぎぬ  
ヒヤシンス手術の前の深呼吸  
入院の上履き古ぶ半夏生  
リハビリの歩行訓練夏きざす

太宰府 山本則男

鞆を昭和の空で漕ぎにけり  
初蝶のまだ退屈を知らぬなり  
行く当てのなき花筏沈みたる  
花の雨老いの言葉のかすれゆく  
春雨といふやはらかき音したる

福岡 永淵恵子

継ぎ足して去年より大き燕の巢  
鶯の巢組にポスト明け渡す  
縞馬の縞目くつきり夏立てり  
松風の一の鳥居に卯波立つ  
電球を揺らし烏賊船出漁す

粕屋 秋 千 晴

藁人形打ちつけてある新樹かな  
犬たちが先にとびこむ日向水  
叩かれて死んだ振りする油虫  
老犬を片蔭に入れ散歩する  
抜きし菜を晒せば菜虫出できたる

直方 曾根富久恵

チューリップ盗まれて土凹みけり  
昭和の日納戸に父の古水筒  
豆飯や膝に始まる夫の老い  
朝曇り苦みの足らぬマーマレード  
上出来と言つて新茶を呉れにけり



大阪 井上 和子

嘯りや砂噴き上ぐる伏流水  
散る桜音色錆びたるハーモニカ  
この田螺琵琶湖の波に太りたる  
花ぐもり厚き封書は置きしまま  
巢の卵落ちたる辺り羽根散らばる

兵庫 青木 朋子

冷や汗も吸ひしハンカチ洗ひけり  
更衣病知らずの卒寿とは  
箱釣の木杵にとつと水注ぐ  
青嵐窓辺の猫の詩人めく  
責任はあるが取らない冷奴

長崎 松尾 龍之介

うろたふる様もゆかしや初蝶々  
単線の台形の上手きんぼうげ  
のどかさの猫の香箱座りかな  
母と剥く豆飯の豆逃げ廻る  
椎若葉たてつけ悪しき寮の窓

福岡 あさなが 捷

水に弾かれ梅の実の浮き上がる  
無花果のむらさきのすぢ剥がしゆく  
蚊遣香背中にうすき蒙古斑  
冷房の効き過ぎ静かなる会議  
寝つかれぬ夜や風鈴音もなし

北海道 押田 裕見子

石鹼の泡細やかに春立つ日  
頭出す馬場のつくしの一列に  
崩れ伏す真昼の雹に打たれぬて  
田の水の大波小波夕立風  
ウイルスの蔓延列島春がすみ

兵庫 岩井 京子

春の夢家居に飽きし旅の駅  
バードウィーク海の鳥見に家を出づ  
鰺刺と鵜の攻防の水しづき  
鵜をめぐけ鰺刺突つ込む鵜のまはり  
鵜の劣勢落ちくる鰺刺見て潜る

熊本 松田 明子

激流に踊らされたる稚鮎かな  
押されては急ぐほかなき花筏  
陵の小さき手水や竹の秋  
お城下の四百年の植木市  
神域へ御師の案内や伊勢詣

大宰府 西住 三恵子

抱かれし児の手ひらひら法師蟬  
秋日傘松の並木の黒々と  
少しづつ形整ふ秋の富士  
一樹より鳴けば応へて鶉高音  
蜻蛉の畑の先々ゴツホの目

